

芦屋大学論叢 第81号
(令和6年3月25日)抜刷

小学校音楽科指導のための
「望ましい範唱」についての一考察

—歌唱共通教材における実践を通して—

石 田 愛 子

小学校音楽科指導のための「望ましい範唱」についての一考察

— 歌唱共通教材における実践を通して —

石田 愛子
芦屋大学臨床教育学部

1. はじめに

範唱とは、「歌唱指導の際、教師が模範として歌をうたうこと」である¹⁾。まだ楽譜を読めない幼児は保育者の歌やピアノを聞いて歌を覚え、まねて一緒に歌うようになるし、大人でも新しい歌を覚えるのは耳から、というのが一般的であろう。テレビやラジオから流れてくる歌を聴いて心惹かれたり興味を覚えたりし、インターネットや動画サイトであらためて聞き直して口ずさむようになり、しっかり歌ってみたいときにはカラオケで、ということが多いのではないだろうか。新しい歌を覚えたり練習したりするとき、楽譜を読むことから始めるのは、ある程度の学習や訓練を経て初めて可能になるものであり、読譜力を身につける以前の子どもたちには、まず耳から聞いて歌を覚える「耳を育てる」ことが重要といえるだろう。耳の発達の著しい幼児期に良質な音楽に触れることが重要なのは言うまでもなく、保育者に音楽力が求められるのもそのためである。

小学校で音楽の授業を行う際にも、教師による範唱や範奏は欠かせない。教職課程科目である「初等教科教育法（音楽）」では、歌唱共通教材（以下、共通教材）全24曲について、曲の特徴を生かした指導内容と具体的な指導法について考え、模範的な演奏ができるようにすることを目標のひとつに掲げている。音楽の授業をするうえで必要となる演奏技能を習得するため、実技にも時間を割き、学期末には実技試験も実施しているが、学生はピアノやソプラノリコーダーに比べ、歌唱の練習をおろそかにする傾向がある。歌唱・ピアノ・ソプラノリコーダーの試験をすると、毎回、歌唱で練習不足が目立つのが気になる現象であった。歌は、幼少期から自然に誰もが歌ってきているため、練習しないと演奏できない楽器に比べると、「なんとなく歌える」気になりがちなのではないか。練習をしないのは、練習の目的や必要性が明確になっていないからではないか。練習の目的や方法、手順を知ることは、指導法を理解することにつながるのではないだろうか。

本稿では、令和5年度の「初等教科教育法（音楽）」で試みた「正確な歌唱」と「表現の工夫」のための実践を通して、「望ましい範唱」の在り方について考察する。

2. 小学校教師に求められる歌唱力・演奏力

小学校学習指導要領音楽科の各学年の目標及び内容には、歌唱においても器楽においても、「思いに合った表現」や「思いや意図に合った表現」をするために必要な技能として、段階的に「範唱を聞いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする技能」「範唱を聞いたり、ハ長調の楽譜／ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌う技能」や「範奏を聞いたり、リズム譜／ハ長調の楽譜／ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして演奏する技能」などを身に付けることができるよう指導すること、と明記されている。学年が上がるに従って

「リズム譜」「ハ長調の楽譜」「ハ長調及びイ短調の楽譜」を見て演奏できるように指導するが、まずは「範唱や範奏を聞いて」歌ったり演奏したりすることから始まっている。段階的に「読譜力」を身に付けながらも、全学年を通じて「聴取力」の指導も求められていることに留意したい。

学習指導要領解説には、「範唱は、教師や児童による演奏をはじめ、音源や映像等の視聴覚教材の利用、専門家による演奏などが考えられる」とある。範唱の目的は、場面によって変わってくる。曲との出会いの場では、「きれい」「かっこいい」「歌ってみたい」と思わせるような、曲のよさや美しさを感じさせる演奏。音源や映像等の視聴覚教材は作品として完成されたものであり、これから学習する歌を紹介したり、曲全体の雰囲気をつかんだりするには、たいへん効果的である。指導の過程で「範唱をよく聴き、音程、リズム、速度、強弱などに気を付けながら繰り返し摸唱させる」場合は、いま注意すべきポイントをわかりやすく的確に伝える演奏。特に、ワンフレーズずつ区切って歌うなどの部分練習や反復練習の場面では、教師が実際に歌ったり演奏したりしてみせながら、子どもたちをリードすることが望ましい。

音楽の指導に必要とされる歌唱力・演奏力としては、「正確かつスムーズに完奏できること」がまず求められる。教員採用試験においては、二次試験で音楽実技が行われる自治体が少なくない。例えば、兵庫県では例年、共通教材を課題曲とする歌唱（無伴奏、指定の調）と器楽（キーボード、鍵盤ハーモニカまたはソプラノリコーダーのいずれかを選択して演奏）の試験が行われている²⁾。また、大阪市でも例年、無伴奏による歌唱（指定曲＝小学校学習指導要領【平成29年3月版】第2章各教科第6節音楽における、第4学年、第5学年、第6学年の歌唱教材の共通教材9曲＝より1曲選択）と、器楽演奏（ピアノ、リコーダー、管楽器、その他の楽器より選択、曲目は自由、ただし歌唱とは異なる曲を準備）の試験が行われている。大阪府は「評価の観点」として、テスト項目ごとの「選考基準」を次のように明記している³⁾。（下線筆者）

無伴奏による歌唱

曲種に応じた発声により、言葉の特性を生かして歌っているか。

歌詞の内容や曲想を感じとり、曲にふさわしい表現を工夫して歌っているか。

響きのある豊かな歌声で歌っているか。

器楽演奏

音楽表現をするための基礎的な技能を身につけ、演奏できているか。

楽器の特徴を生かし、曲にふさわしい音色や奏法を工夫して表現できているか。

曲想を感じとり、曲にふさわしい表現を工夫して演奏できているか。

教員採用試験は、各自治体の教育委員会が求める教師像に合致し、教師としての資質能力を有する人物を選考するために行われるものであり、音楽実技の試験は、音楽の授業をするうえで必要な知識・技能を有しているかを判定するものである。よって、例えば大阪府が具体的に示しているような「評価の観点」を満たすことは、望ましい範唱・範奏の在り方として、ひとつの指針になるものと考えられる。先に述べた「正確かつスムーズに完奏できること」は最低限クリアすべきものであり、大阪府の選考基準に従えば、歌唱においては「言葉の特性」を理解し、「歌詞の内容や曲想」を感受し、「曲にふさわしい表現の工夫」を「曲種に応じた発声」による「響きのある豊かな歌声」で伝えることができるものでなければならない。

筆者担当の「初等教科教育法（音楽）」と教員採用試験対策講座（音楽実技）では、実技試験のチェックポイントを次のように示している。

歌唱

- 声がよく通る ことばがはっきりしている 音程が正確である 歌詞が正確である
- 拍子感をもって歌っている 安定感がある 表情豊か 表現に工夫がみられる 歌う姿勢, 目線

器楽

- 読譜が正確である 指使いなど技術が正確である 拍子感, 安定感がある
- 表情豊か 表現に工夫がみられる 演奏の姿勢

準備

- 楽譜をきちんと用意している 楽譜や楽器の取扱いが適切である

態度

- 場にふさわしい立ち居振る舞い 落ち着きがある, 堂々としている
- 表情が明るい, 生き生きしている 清潔感がある きびきびしている 礼儀正しい

以上のポイントは、試験攻略のためにセルフチェックしやすいように細分化しているが、演奏に関しては「正確さ」と「表現の工夫」の2点に集約される。教師の歌唱や演奏は子どもたちの手本となるため「正確さ」が求められることは言うまでもないが、正確だけでなく「表現の工夫」が生き生きと伝わってくる演奏が、子どもたちの興味と意欲を刺激するものとする。

3. 「正確な歌唱」と「表現の工夫」のための実践

学習指導要領では各学年4曲の共通教材について、1学年から4学年では全4曲を、5・6学年では4曲中3曲を指導することとされている。また、本学で受験希望者の多い自治体の教員採用試験では、共通教材が音楽実技の課題曲となることが多い。毎年「初等教科教育法（音楽）」を履修する学生を対象に、共通教材の学習経験についてアンケートを実施しているが、5・6学年の共通教材について「知らない」「習っていない」と回答する学生が非常に多い。5・6学年では共通教材4曲中3曲しか指導されないことの表れとも考えられるが、特に5年生の教材については記憶定着率の低さが際立っていて驚かされる。大学生を対象とした共通教材の認知度については様々な調査研究が行われている⁴⁾⁵⁾が、いずれも《日のまる》《越天楽今様》《冬げしき》《まきばの朝》《スキーのうた》の認知度、記憶定着率が低い傾向にある点で共通しており、本学学生の傾向も完全に一致する。大学の授業で「学び直し」になる歌もあれば、「初めて知る」歌も少なくないということである。

ここからは、共通教材における「正確な歌唱」と「表現の工夫」のための実践について考察を試みたい。

3.1 歌詞

本学学生が楽器演奏に比べて歌唱の練習をおろそかにする傾向があることは先に述べたが、歌唱の実技試験において最も練習不足とみなされるのは、「歌詞や旋律を正確に覚えていない」ことである。正しい音程で歌うのが難しいということは、特に緊張する場面ではままたるが、歌詞や旋律を覚えていない、あるいは

間違えて覚えているということは「あってはならない」。歌詞を正しく覚えるうえで、「歌詞を読む」と「歌詞のリスニング」は一定の効果があったと考える。

3.1.1 歌詞を読む

授業中、楽譜を見ながら音源を聞かせ、次に教員のピアノ伴奏で歌うように促すと、学生は「なんとなく」歌っている。1年生から4年生までの共通教材は「知っている」「習った記憶がある」学生が多く、歌詞内容もわかりやすいため、比較的声も出ているが、5・6年生の共通教材のいくつかは「知らない」「習っていない」学生が多いため、まことに心許ない。

楽譜に書かれる歌詞はひらがな表記のため、たとえ意味を理解していなくても、ある音符に指定の発音をすれば歌うことはできる。しかし、歌詞の意味内容を理解し、情景や心情を思い浮かべることは、表現の工夫をするうえでは不可欠である。特に5・6年生の共通教材には歌詞が文語体のものがあるので、漢字かな交じりの縦書きで歌詞を音読し、子どもたちに意味をわかりやすく説明したり、情景や気持ちを想像するような言葉かけをしたりすることは、指導の手順としても重要である。歌詞の音読は、意味内容を理解するだけでなく、オノマトペの豊かさや面白さ、文語体の七五調のリズムや語感の格調高さなど、声に出して読むことでわかる日本語の美しさを感じることができる。また、「抑揚をつける」「語尾をそっと置く」など、読み方の工夫は、歌い方の工夫にも活かされる。

3.1.2 歌詞のリスニング

授業で楽譜を見ながら音源を聞き、その曲の特徴を生かした指導内容について学習し、一通り歌ってみた後でも、歌詞は意外とうろ覚え、ということがある。今回、共通教材4曲について歌詞のリスニングを試みた。音源⁶⁾を聴きながら歌詞を書き取り、書けたらテキスト⁷⁾の漢字かな交じりの縦書き歌詞で確認する、というものである。正しく聴き取れなかったところは、覚え間違っている(しやすい)箇所、あるいは言葉が伝わりにくい箇所、ということができる。

《ふじ山》で実践したところ、「あたまをくもの／うえにだし」の部分で誤って「うえにたち」とした学生が複数名いた。「だし」を「たち」と聞き違えたのは、子音の発音に注意すべし、ということであるし、「あたまをくもの」とのつながりを考えれば「上に立つ」のはあり得ない。また、「かみなりさまを／したにきく」の部分で誤って「かみなりさまの」や「したにみる」とした学生も複数みられた。「しほうのやまを／みおろして」に続く部分なので「みる」と思い込んでしまった、あるいは「を」と「の」は母音が同じなので聞き違いしやすかった、ということが考えられる。ここで歌詞を全員でもう一度読み直す。「富士山は日本一高い山だから、雲の上に頭が出てしまうんだね。だから周りの雲を見下ろすことになる。富士山を擬人化して、周りを見下ろしている姿として描いている。その雲の中で雷がゴロゴロって鳴っているのが下のほうから聞こえてくる。富士山がまず“見下ろして”、次に“聞く”。富士山の頭に目と耳をつけてみた感じかな？」などと説明(図1参照)すると、歌詞がイメージを伴って、正しく理解されるだろう。「しほうのやま」は全てひらがなではわかりにくい、「四方の山」と漢字交じりで見ると難なく理解できる。歌詞全体の文意を把握すれば、覚え間違いは防ぎやすい。正しく聴き取れなかったところは、子音をはっきり発音しないと聞き手に伝わりにくい部分として確認できる。

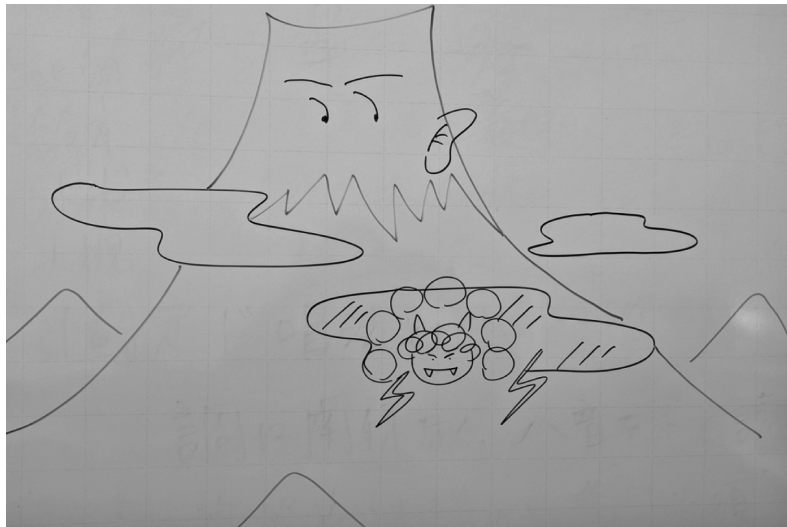


図1 《ふじ山》 1 番の歌詞の一部を図解した例

《冬げしき》では、「さぎりきゆる／みなとえの／ふねにしろし／あさのしも」の「みなとえのふね」を「港への船、港にゆく船だと思っていた」という声があった。「港江」のように日頃なじみがない言葉は、漢字かな交じりの歌詞で確認して初めて気づく一例である。

3.1.3 情景や気持ちを想像する

例えば、《うみ》の冒頭「うみはひろいな／おおきいな」を歌って、「今、どんな色の風景が見える感じがする？」と問いかけると、「青い海、青い空」と返ってくることが多い。ト長調ののびやかな旋律も相まって、晴れ渡った青空と青く光る海を想像する人が多いだろう。ところが続きを歌うと、「つきがのぼるし／ひがしずむ」。「あれっ？この歌、夕暮れの海やったん？」「2 番は『うみはおおなみ／あおいなみ』やから、やっぱり海は青く見えてるよ」「1 番と 2 番は全然ちがうけど、1 番の前半と後半でも場面が変わってるんとちがう？」など、ディスカッションが活発になる。「教科書に青い海の写真が出てるから、月の出とか想像せんかった」という声に代表されるように、「うみ」についての固定観念や思い込みがあることにも気づく。

また、例えば《とんび》を歌って、「今、この人はどこにいると思う？」と作中人物の居場所を想像させる。「浜辺」「山道」「広いところ」「船の上」。「じゃあ、とんびは何羽いると思う？」と問うと「1 羽」「2 羽」「たくさん」「この人が多分ひとりだから、とんびも 1 羽がいい」。だんだん想像が広がってゆく。《とんび》は 1 番の「とべとべとんび」が 2 番で「とぶとぶとんび」に変わる以外、1 番と 2 番の歌詞は同じである。「1 番は山道を登りながら、とんびに鳴いてくれてって思って、2 番は広いところに行き着いて、草の上で寝転がって、空を飛び回って鳴いているとんびをただ眺めている感じ」。時間の経過と心情の変化にも想像が及ぶ。「とんびって、仲間同士の合図で鳴くんやったら、1 羽ってことないんちゃう？」という声も。

歌を歌って場面や気持ちを想像するとき、正解はない。(詩人がどこで、どのようなきっかけで作詞をしたのかということは、この際おいておく。) 自由な発想と意見交流こそが楽しい時間になる。

3.2 音程

正しい音程で歌うのは、実はとても難しいことである。個人差も大きく、音程を正しくとるのが苦手な人は大変苦勞する。正しい音程感覚を身につけるには、階名唱が有効である。歌詞で歌う前に、階名唱での練習を必ず取り入れたい。リズムを単純化して、音の上がり下がりに意識を集中して練習するのも有効であろう。《ふじ山》と《とんび》の例を以下に示す（譜例1, 2参照）。1段目は2小節単位で練習し、できたら4小節を続けてみるようにする。指導の際は、2小節または4小節単位で範唱し、子どもたちに模唱させるとよいだろう。リズムを単純化した音程練習により、同一または類似の音型の繰り返しの気づくことは、曲の構造を理解するうえでも有効である。

♩ = 92

5

9

13

譜例1 《ふじ山》のための音程練習

譜例2 《とんび》のための音程練習

3.3 楽譜

楽譜には多くの情報が含まれている。音の高さ、音符や休符の長さ、スラー、ブレス、強弱記号など。フレーズの終わりの音の長さや休符（3拍のばして切る、など）はおろそかになりがちなので注意したい。また、スラーのかかり方は言葉の区切りと密接に関係している。

形式に着目すると、共通教材はA-A'-B-A'やA-A'-B-B'など二部形式のものが多い。4小節単位でとらえると、前半のAとA'は似通っていて、後半Bの部分で全く異なる音型やリズムが表れるパターンが多い。その変化する部分こそ「表現の工夫」のしどころである。「作曲者の工夫が感じられるところはどこだと思う？」といった問いかけが、音型やリズムや音域の変化への気づき、楽譜に書かれた作曲者の意図を尊重する態度につながるであろう。

例えば《とんび》では、Bの部分でとんびの鳴き声である「ピンヨロー」が4回繰り返される。とんびが飛翔する様子を想像し、強弱など表現を工夫したいところである。高く低く、遠く近く飛ぶとんびの鳴き声を自由に想像したり工夫したりできるよう、小学校の教科書⁸⁾の楽譜では強弱記号が記されていない。強弱記号が書かれている楽譜でも、1小節単位で交互に強弱が変わるものと、2小節単位で変化するものがある⁹⁾。楽譜には複数のバージョンが存在することがある、ということも知っておきたい。

3.4 付点のリズムの歌い方について

「付点4分音符+8分音符（ターンタ）」のリズムは、《ふじ山》や《とんび》の冒頭、《冬げしき》の2小節目、《おぼろ月夜》のアウフタクトに続く小節など、多用されるリズムパターンである。拍子感をもつ

て歌おうとするあまり、2拍目が強調されて《ふじ山》の冒頭が「あーアたまーを一」になったり、《とんび》の冒頭が「とーオベとーベー」になったりする。（このとき、無意識に首を縦に振ってしまっていることが多い。）付点4分音符は1拍半であることを意識して正しいリズムで歌おうとするのはよいが、言葉や曲想がそこなわれないように注意が必要である。

《とんび》の場合、冒頭が「とーオベとーベー」になってしまうのは、4分音符単位で拍を縦に刻んでしまうからである。「とべとべとんび」の3回の「と」を始点に円を描くように腕を回しながら歌ってみると、この縦揺れ感が解消した。さらに、徐々に大きな円を描くようにすることで（図2参照）、自然にクレッシェンドがつき、レガートに歌えるようになった。ピアノ伴奏も、拍の感じ方や歌い方に影響する。いわゆる「ブンチャッチャ」の伴奏（譜例3）¹⁰ は拍感をはっきりしているので、リズムを正確に捉えるには向いているが、アルベルティバス（譜例4）¹¹ のほうが2拍分をひとかたまりでとらえた回転運動が感じられるため、メロディーをなめらかに歌いやすい。指導の段階や目的に応じて、ピアノの伴奏型を使い分けるのも有効であると考えられる。

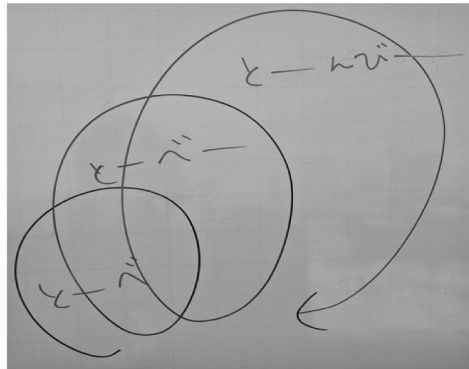


図2 《とんび》冒頭の歌い方イメージ

♩ = 88~96

mf $\overset{C}{1}$ $\overset{1}{1}$ $\overset{2}{2}$ F V

1 と べ と べ と ー ー と ー ん び
2 と ぶ と ぶ と ー ー と ー ん び

譜例3 《とんび》の伴奏（「ブンチャッチャ」型）



譜例4 《とんび》の前奏部分（アルベルティバス）

4. まとめ

今回の試みの成果として、学生の歌唱への積極性が増し、実技試験においても表現の工夫と練習のあとがみられる演奏が多かったことが挙げられる。試験終了後、「歌唱についてどのような練習をしたか」を問うアンケートを行ったところ、表1のような結果であった。

表1 歌唱の実技試験のための練習方法（複数選択）

練習方法	回答者数（割合）
繰り返し何度も歌った	13 (100%)
参考になりそうな動画・音源を視聴した	10 (77%)
友だちの前で歌って聴いてもらった	10 (77%)
ピアノを弾いて音を確認めた	8 (62%)
歌詞を書いてみた	8 (62%)
自分の歌を録音して聞いてみた	2 (15%)
鏡の前で歌ってみた	1 (7%)
その他（親に聴いてもらった、カラオケに行った、試験のイメージトレーニング）	5 (38%)
練習をしなかった	0 (0%)

半期15回の限られた授業時間内で、歌唱やソプラノリコーダーの実技指導も充実させるのは難しい。今回、授業で実践したことが試験のための自主練習に活かされており、授業時間外の主体的な取組みを促すためには、練習の目的と具体的な方法を明示することが重要であることをあらためて感じた次第である。今回のクラスには歌が好きな学生が二人いて、皆がつかれて安心して声を出せる雰囲気があったのも大きい。試験に向けて、「友だちと一緒に練習した」学生が多かったのは好ましい結果である。

大人も子どもも、「ひとりで歌うのは苦手」でも、「みんなで歌うのは楽しい」のである。範唱をする際は、「歌うって、楽しい」「上手に歌えるともっと楽しい」と思えるような雰囲気づくりを心がけたい。その時々で子どもたちに伝えたいことについて明確な思いや意図を持ち、よりよく歌うための具体的な方法を言語化できること。そして何よりその曲のよさを本人が感じて、それを生き生きと表現できることが「望ましい範唱」といえるのではないかと考える。

引用・参考文献

- 1) 国語辞書, <https://dictionary.goo.ne.jp> (2024.1.3 取得)
- 2) 令和6年度兵庫県公立学校教員採用候補者選考試験実施要項, 兵庫県教育委員会, p.12.
- 3) 令和6年度大阪市公立学校・幼稚園教員採用選考テスト受験案内, 大阪市教育委員会, p.9-10,17.
- 4) 溝部ちづ子・緒方満・押川貞生・中村孝・道法亜梨沙「小学校教員養成課程の学生における「歌唱共通教材」認知度に関する一考察－大学1年次学生の実態調査を通して」, 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究, 2020.
- 5) 虫明眞砂子・岸本未有「児童の立場から見た小学校音楽科における歌唱共通教材の検討」, 岡山大学大学院教育学研究科研究集録第184号, 2023.
- 6) 『新編 小学生の音楽』指導用CD, 音楽之友社, 日本コロムビア (1992)
- 7) 『新版 教員養成課程小学校音楽科教育法 2022年改訂版』教育芸術社 (2019)
- 8) 『小学生の音楽4』教育芸術社, 平成23年.
- 9) 『新版 教員養成課程小学校音楽科教育法 2022年改訂版』教育芸術社 (2019), p.118,145.
- 10) 『新版 教員養成課程小学校音楽科教育法 2022年改訂版』教育芸術社 (2019), p.118.
- 11) 『新版 教員養成課程小学校音楽科教育法 2022年改訂版』教育芸術社 (2019), p.144.